

訪 問 国：ニュージーランド

研修テーマ：体力・運動能力の向上

所属名 千葉市立寒川小学校

氏 名 渡 辺 千映子

1 はじめに

(1) 課題

「ニュージーランドの学校体育の現状と課題」

(2) 目的

ニュージーランドの学校体育の充実に向けた先進的かつ具体的な取組を視察し、課題解決に向けた情報や知識を取得する。そしてニュージーランドと日本の取組を比較・検討していく。

2 ニュージーランドの教育状況

1989 年教育法制定により「学校分権化に力点を置いた教育制度」がつくられている。100 年以上続いた教育委員会制度の廃止、公立全初等・中等学校に保護者の代表を中心に構成される、「学校理事会 (BOT : Boad of Trustees)」を設置している。5 歳の誕生日から 19 歳の誕生日後の 1 月 1 日まで、すべての公立学校の教育が無償で受けられることが保障されている。

また、カリキュラムでは学習領域ごとに身に付けるべき 8 段階のレベルと、それらを身に付ける学年が明示されているが、教科書制度はなく、教えるべき具体的な内容や方法は学校と個々の教員に任されている。

ニュージーランドの体育・保健体育科の目標は、「健康や運動に関する学習を通じた子供たち自身、他者及び社会のウェルビーイング（幸福、良好な状態）の実現」である。「スポーツニュージーランド」や「地域スポーツトラスト」が、学校と地域のスポーツクラブをつなぐ役目も担っており、情報提供を行ったり、優秀な学校または教員に対して、補助金制度を取り入れたりと密接にかかわりをもっている。

3 学校訪問をして

(1) フェルガソン中学校

1996 年開校。7 年生 8 年生の 13 クラスで、11 ～13 歳の子供が通っている全校 405 名の学校である。家庭科、木工、ドラマ、絵画以外は、担任が教えている。学校の目標は、「すばらしい人間になる」「生徒が成果をあげられる」「多くのことに関わる」である。53 種類の人種（マオリ系 25% パシフィカ系 5%パケハ系 66%アジア系 4%）から構成されており、全ての子供に平等に機会を与えるようにしている。

週に 3 ～4 時間の保健体育の授業があり、木曜日はアフタヌーンスポーツ、そして毎日フィットネスの時間が設定されている。ウェリントン市内では一番グラウンドが広く、全面に芝生が敷かれている。子供たちは、転んでも痛くないため思い切り運動に取り組んでいた。学校にはラグビーチームがあり、指導者は教員や外部コーチである。オーディションを受けて入部し、一週間に 2 ～3 時間の活動をしている。

伝統的なスポーツやマオリ系のゲームを楽しむ子どもたちは、本当に生き生きと運動に取り組んでいた。楽しい経験を積み重ねていくことが運動に対する意欲を高めることにつながると実感した。



【フェルガソン中学校の様子】

(2) マウンガタプ小学校

「2013 PENZ Award」を受賞した学校

である。

EBC (EveryBody Counts)「みんなで一緒」という PENZ (ニュージーランド身体教育協会) のプログラムを履修した教員が中心となり、体育科の学習を進めている。

EBC ではネットボールやクリケットなどの伝統的なスポーツを行っている。その際子供たちと一緒に考えながら、小学生に合うようにルールや作戦を工夫し、易しいルールで運動を楽しんでいく中で、基本的な動きを学んでいる。

ネットボールではボールを3つ入れ、誰もがボールに触れるようにしていた。クリケットでは、どのグループでやりたいかを子供たちが決め、習熟度別に3つのグループでゲームを行っていた。

毎時間の学習の終わりには、「Reflection」という話し合いの場が意図的につくられている。①うまくいったこと②変えた方がよいこと③伝統的スポーツと同じところ違うところなどをクラス全員で話し合っていた。自分たちの良いところ、改善したほうがよいところなどを自分たちで見付けていくようなプログラムを行ってきたことにより、子供たち一人一人が自信をもって取り組むようになり、けんかやいじめがなくなったということである。

かかわり合いを通して課題を解決していく学習形態に、私たちが目指している学習と共通点が多く、取り入れたいこともたくさんあった。



【マウンガタプ小学校】



【マウンガタプ小学校のグラウンド】

4 研修成果の活用

ニュージーランドでは、年齢が上がるにつれ運動から離れ、家に帰ってからは運動をしない子供が増えてきていることが課題となっていた。これは日本の課題と共通する部分である。また、子供たちに合うように伝統的なスポーツのルールや作戦などを工夫していくところは、日本の体育学習と共通している。目指しているところは、日本もニュージーランドも同じであると感じた。

学校現場では、伝統的なスポーツを伝えていながらも、用具や場づくりなどは、日本では目にしないものや新しいものが多かった。その中には学校のグラウンドなどに常時設置され、子供たちが日常的に使用できるようになっているものもあった。毎日の休み時間やフィットネスの時間に、自主的に子供たちが運動に親しんでいる姿はぜひ見習っていきたい。

また、「スポーツニュージーランド」や「スポーツウエリントン」のような地域スポーツトラストが、学校、スポーツクラブ、地域をつないでいる。学校に対し、スポーツクラブや指導者を紹介したり、個別に家庭訪問をして、子供の抱える問題について、運動を通じて解決していったりする活動をしている。そのため、地域の健康に対する意識、子供たちを運動にかかわらせようとする意識は高い。このことは日本ではあまり見られないことである。学校、スポーツクラブ、地域がもっと連携して子供たちの運動経験を増やしていくことができるような取組を考え、まずは勤務校で実践し、本市に発信していきたい。